



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                             |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 北大生101人と飲酒：「飲酒に関する大学生の意識調査」（2007年）                                                          |
| Author(s)        | 眞崎，睦子                                                                                       |
| Citation         | 北海道大学大学院教育学研究院紀要，103，113-126                                                                |
| Issue Date       | 2007-12-29                                                                                  |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.103.113">https://doi.org/10.14943/b.edu.103.113</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/30338">https://hdl.handle.net/2115/30338</a>           |
| Type             | departmental bulletin paper                                                                 |
| File Information | 103_113-126.pdf                                                                             |



# 北大生 101 人と飲酒

－「飲酒に関する大学生の意識調査」（2007年）－

眞 崎 睦 子\*

## Attitudes Toward Alcohol Consumption at Hokudai: Japanese college students' awareness of drinking and alcohol use in their lives 2007

Mutsuko MASAKI

### 【目次】

はじめに

1. 「飲酒に関する大学生の意識調査」（2007年）

－回答者について－

2. 北大生 101 人の飲酒経験

3. 大学生と飲酒の強要

4. 酒は薬物である

おわりに－適正飲酒教育のあり方を探る

Abstract

【キーワード】 適正飲酒教育、自助組織、入門薬物、問題飲酒、飲酒の強要

### はじめに

日本において未成年の飲酒は今のところ認められていない。しかしながら、飲酒という行為は、未成年の学生も数多く在籍する日本の大学において、学生生活の一部になっているといっても過言ではない。昔ながらの「新歓コンパ」、「打ち上げ」の宴など、様々な名目で飲酒が許される会合は大学の内外にあふれている。多くの場合、学生たちは、このような席での酒を仲間とのコミュニケーションに欠かせない道具としてとらえている。一方、飲酒という行為が危険な事態を招く場合も少なくない。北海道大学に関していえば、2007年5月、ある大学公認サークルの学生110人が市内の花見客で賑わう公園で飲酒、未成年者8人を含む9人が急性アルコール中毒の症状となり、救急車で北大病院に運ばれるという事態となったことが記憶に新しい<sup>1</sup>。また、昭和59年から平成7年にかけて、7名の学生が飲酒事故により命を失っている。この間の全国の飲酒事故による死亡者数は93名であり、北海道大学の学生が実にこのうちの7.5%を占めていることになる<sup>2</sup>。一体、大学という場に連なるものたち、特に大多数をしめる大学生はどのような意識のもとに飲酒をしているのだろうか。ある

\* 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授

いは飲酒という行為をながめているのだろうか。筆者は2002年以来、日本の大学生を対象に、無記名アンケート、「飲酒に関する大学生の意識調査」を行っている<sup>3</sup>。本稿では2007年4月に北海道大学に通う大学生を対象に行った同調査の結果を紹介し、分析を加える<sup>4</sup>。

## 1. 「飲酒に関する大学生の意識調査」（2007年）—回答者について—

2007年4月16日、無記名アンケート「飲酒に関する大学生の意識調査」を行った。これは、北海道大学全学共通科目の講義、「社会問題としての飲酒」（分野別科目「社会の認識」）の初回授業参加者を対象に行ったものである。アンケート開始時に、（1）無記名アンケートであること、（2）調査結果を授業の中で教材として利用すること、（3）調査結果を学内外で利用する場合があること、以上の3点を口頭で説明した。加えて、5月7日の授業では口頭及び配布したプリント（Newsletter 1）<sup>5</sup>で（2）、（3）を再び確認した。回答者数は本稿のタイトルにもあるように101名であった。その詳細を以下の表1、2、3で示す。

表1 Q1. あなたの身分（学年）は？

| 学年 | 1年生 | 2年生 | 3年生 | 4年生 | その他 |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 人数 | 21  | 74  | 1   | 5   | 0   |
| %  | 21% | 73% | 1%  | 5%  | 0%  |

表2 Q2. よろしければ年齢を（ ）内にご記入ください

| 年齢 | 18  | 19  | 20  | 21 | 22 | 23 | 24 | その他 |
|----|-----|-----|-----|----|----|----|----|-----|
| 人数 | 13  | 38  | 26  | 9  | 3  | 4  | 1  | 7   |
| %  | 13% | 38% | 26% | 9% | 3% | 4% | 1% | 7%  |

表3 Q3. あなたの性別は？

| 性別 | 男性  | 女性  | その他（ ） |
|----|-----|-----|--------|
| 人数 | 82  | 17  | 2      |
| %  | 82% | 17% | 2%     |

表1で示すように学年別にすれば2年生が全体の7割を占め、2割の1年生がこれに続く。3年生、4年生は合わせても6%弱である。5月以降、大学院生の聴講が確認できたが、アンケート回答者としての大学院生の数は表が示すように0（ゼロ）である。年齢別にみると、表2で示すように18歳が13%、19歳が38%、つまり、回答者のうち約半数が未成年者で

ある。この年齢構成に留意しながら論考をすすめる。性別については、表 3 のように、回答者の 8 割が男子学生であった。また、問うてはいないが、受講の目的は、後に示す調査結果から「社会問題としての飲酒」に特に関心があるものは少数であったと考えられる。

## 2. 北大生 101 人の飲酒経験

以下の表 4 で示す数字から、これら 101 名の学生の飲酒経験を読み取ってみよう。

表 4 Q 4. あなたはアルコール飲料(日本酒、ビール、ウィスキー、焼酎など)を飲んだことがありますか？

|    | はい  | いいえ | 無回答 |
|----|-----|-----|-----|
| 人数 | 96  | 4   | 1   |
| %  | 96% | 4%  | 1%  |

1. で述べたように、回答者の約半数は未成年者である。しかし、飲酒経験のあるものは全体の 96 % を占める。この数字は、酒が未成年者も参加する日本の儀礼や祭の場に欠かせないものであることに加えて、未成年者であっても大学生になれば、あるいは中学・高校を卒業するなどして社会に出れば、年齢に関係なく半ば公然と飲酒が許されることが多いことを示していると推察する。これらの飲酒経験があるものを対象に用意した質問が以下に示す Q 5 (Q 4 で「はい」を選んだ方におたずねします。あなたは定期的にアルコール飲料を飲んで 있습니까?) と Q 6 (次のうちからその頻度を選んで下さい。) である。

表 5 Q 5. あなたは定期的にアルコール飲料を飲んで 있습니까？

|    | はい  | いいえ | 無回答 |
|----|-----|-----|-----|
| 人数 | 45  | 52  | 4   |
| %  | 45% | 51% | 4%  |

表 6 Q 6. 次のうちからその頻度を選んでください。

|    | 毎日 | 週に2,3回 | 週に1回 | その他 |
|----|----|--------|------|-----|
| 人数 | 3  | 16     | 15   | 11  |
| %  | 3% | 16%    | 15%  | 11% |

表5からは定期的に飲酒するものが4割を超えることがわかる。表6では、飲酒が日課のようになっているものが少数ではあるが確認できる。101名のうち34名、3割強の学生が週に1回以上の頻度で飲酒をしている計算となる。さて、彼らはなぜ定期的に飲酒をするのだろうか。次に示す表7でその実態をみてみよう。

表7 Q7. あなたはなぜ定期的にアルコール飲料を飲むのですか？

| 理由                    | 人数 | %   |
|-----------------------|----|-----|
| 習慣になっていて特に理由はない       | 8  | 8%  |
| アルコール飲料がないと眠れない       | 0  | 0%  |
| いやなことを忘れるため           | 3  | 3%  |
| 友人らとの会話を楽しむ材料として欠かせない | 22 | 22% |
| その他（ ）                | 14 | 14% |

「友人らとの会話を楽しむ材料として欠かせない」を選ぶものが多いということは予想通りであった。しかし定期的に飲酒するもの45名のうち、8名が「習慣になっていて特に理由はない」と答えていることにも注目したい。「その他」の理由として「酒が好きだから」というものが多かった。他の選択肢の中に「酒が好きだから」という項目を加えなかったのは筆者の落ち度である。次回の調査の際にこの項目を付け加えることにする。

さて、定期あるいは不規則の飲酒により、大学生はどのような影響を受けているのだろうか。表8で確認したい。

表8 Q8. あなたは飲酒（アルコール飲料を飲むこと）によって次のようなことを経験したことがありますか？（複数回答可）

|              | 人数 | %   |
|--------------|----|-----|
| 頭痛           | 58 | 57% |
| 嘔吐           | 60 | 59% |
| 一時的に記憶を失う    | 34 | 34% |
| 二日酔いで学校に遅刻する | 17 | 17% |
| 二日酔いで学校を欠席する | 15 | 15% |
| 暴言を吐く        | 7  | 7%  |
| 暴力を振るう       | 3  | 3%  |

選択肢のうち、「頭痛」、「嘔吐」、「一時的に記憶を失う」は飲酒が回答者の身体に及ぼす影響である。「頭痛」と「嘔吐」に関しては、回答者の半数以上が経験済みである。自身にとっての適量を知らぬが故なのか、何らかの事情で適量を超える飲酒をするに至ったのかは不明である。3割を超える回答者が「一時的に記憶を失う」ような状態を経験していることは見過ごすことができない。「二日酔いで学校に遅刻する」、「二日酔いで学校を欠席する」では飲酒が学生生活に与える影響を確認した。この数字を多いとするか少ないとするか、後の授業では意見が分かれた。「暴言を吐く」、「暴力を振るう」は、程度の差こそあれ、他者になんらかの害を及ぼすという、飲酒による深刻な影響を受けている場合であると考え

られる。これを選択したものの数は少ないが、本来あるべきではない。見方を変えれば、Q 8 の回答者らはこれらのいわば「負」の影響が、「コミュニケーションを楽しむ道具」であるはずの酒によるものであるとすでに認識していることがわかる。

### 3. 大学生と飲酒の強要

大学生のコンパなどの飲み会に限らず、アルコール飲料が出される席での飲酒の強要は、近年、アルコール・ハラスメントとして知られるようになった。北海道大学構内でもアルコール薬物問題全国市民協会による「アルハラ」防止のポスターがみられる。アルコール・ハラスメントという語は、「セクシャル・ハラスメント」が日本で一般的に用いられるようになって以降、用いられるようになったものである。特に飲酒の強要が社会問題として注目されるようになった1990年代後半から急速に広まった。大学を舞台にした飲酒の強要による「事件」としては、1999年、熊本大学医学部1年生が、所属サークル新歓コンパ恒例のバトルと呼ばれる「飲み比べ」の後、死亡したことがよく知られている<sup>6</sup>。急性アルコール中毒による死亡事故として、全国で初めての刑事告訴・賠償請求訴訟となったことでも注目されたが、この現場には医師である医学部の教官（当時）ら、医師を目指す上級生らが同席していたこともあわせて世に衝撃を与えた。また2002年には、神戸大学の教官（当時）が実験の失敗を理由に学生に飲酒を強要、その結果、2名の学生が急性アルコール中毒で入院するという事件がおこった<sup>7</sup>。最近では、神戸市内の高校で、同級生らがペットボトルのジュースにウオツカを混ぜて男子生徒に飲むようにはやしたて、急性アルコール中毒にさせたとして同級生らが傷害容疑で書類送検される事件があった（2005年9月、新聞報道は翌年11月）<sup>8</sup>。このように「飲酒の強要」は危険かつ不幸な結果を招く場合がある。また、このような飲酒事故が繰り返し報道されているにも関わらず、筆者の過去の調査でも、多くの大学生が飲酒を強要された経験があり、また他者に対しての飲酒の強要がなかなかなくなることがわかっている<sup>9</sup>。このような「飲酒の強要」が、調査対象となった大学生にとってどれくらい身近なものであるかを調べるために用意したのがQ 9 から Q 14 までの質問である。回答者の「飲酒の強要」にまつわる経験を次の表 9 ～ 14、図 1、2 で示す。

表 9 では全回答者の4割を超えるものが「飲酒を強要されたことがある」と答えていることが確認できる。2002年にこの調査を開始して以来、飲酒を強要されたことがある回答者の割合は4割を下回ったことがない。しかも、「はい」と答えた回答者のうち20名が未成年者であることは見逃しがたい。さらに注目すべきは表 10 で確認できるように飲酒を強要された結果、断ったものが42名中、わずか1名であるという事実である。後の授業でこの結果を紹介したところ、「サークルの飲み会の盛り上がった雰囲気の中で先輩や仲間におすすめられた酒を断ることはできない」という声が多数あがった。その声が示すような結果が確認できるのが表 11 である。飲酒を強要するのは大学の先輩が圧倒的に多く、大学の友人がこれに次ぐ。飲酒と大学生を取り巻く上下関係とが無縁ではないことが確認できる。ただ、今回の調査ではアルバイト先の先輩が飲酒を強要するというようなことが例年より少なかったことも付け加えておく。表 12、表 13、表 14 は回答者に飲酒の強要を自ら行った経験について問うたものである。本来、このような経験はないことが望ましいが、1割を超える回

Q9 あなたは飲酒を強要されたことがありますか？

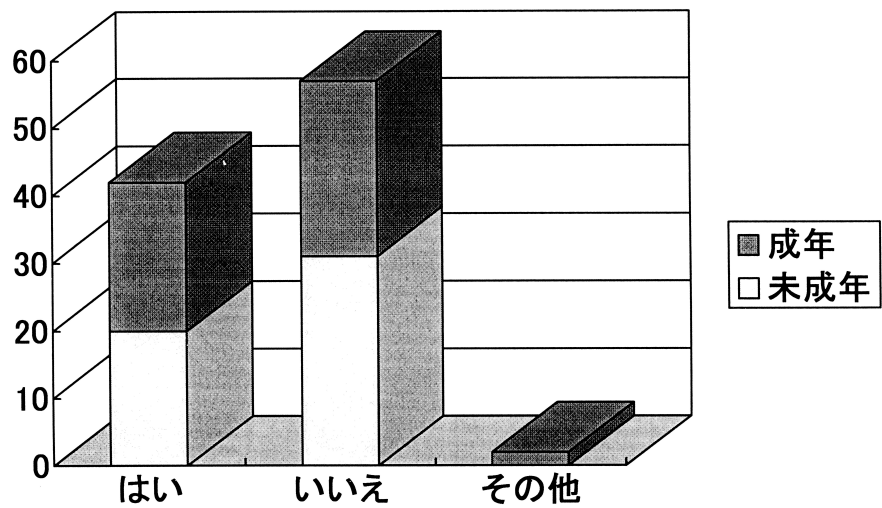


図1 あなたは飲酒を強要されたことがありますか？

回答者の41.58%（42名）が「はい」と答えた。  
「はい」と答えた学生には未成年者20名が含まれている。

真崎睦子「飲酒に関する大学生の意識調査」（2007年）

表9 Q9. あなたは飲酒を強要されたことがありますか？

| 回答  | 回答者数 | （未成年者） | %   |
|-----|------|--------|-----|
| はい  | 42   | （20）   | 42% |
| いいえ | 57   | （31）   | 56% |
| その他 | 2    | （0）    | 2%  |

## Q10. 飲酒を強要された結果、あなたはどうしましたか？

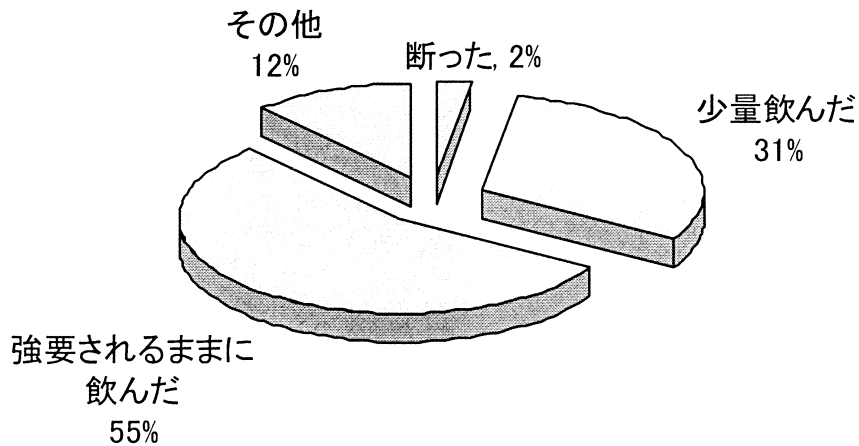


図2 飲酒を強要された結果、あなたはどうしましたか？

「断った」と答えた学生は42名中、1名であった。半数を超える学生が強要されるままに酒を飲み、約3割の学生が少量ではあるが、やはり酒を飲むことで応じている。

眞崎睦子「飲酒に関する大学生の意識調査」（2007年）

表10 Q10. 飲酒を強要された結果、あなたはどうしましたか？

| 回答          | 回答者数 | %   |
|-------------|------|-----|
| 断った         | 1    | 2%  |
| 少量飲んだ       | 13   | 31% |
| 強要されるままに飲んだ | 23   | 55% |
| その他         | 5    | 12% |

(回答者数：42)

表 11 Q 11. あなたに飲酒を強要したのは次のうち誰でしたか? (複数回答可)

| 男              | 性  | 女         | 性  | 計(人数) | %   |
|----------------|----|-----------|----|-------|-----|
| 大学の先輩          | 38 | 大学の先輩     | 18 | 56    | 55% |
| 大学の後輩          | 6  | 大学の後輩     | 2  | 8     | 8%  |
| 大学の友人          | 10 | 大学の友人     | 7  | 17    | 17% |
| 大学の指導教員        | 0  | 大学の指導教員   | 0  | 0     | 0%  |
| (アルバイトの経験のある方) |    |           |    |       |     |
| アルバイト先の先輩      | 4  | アルバイト先の先輩 | 1  | 5     | 5%  |
| アルバイト先の友人      | 2  | アルバイト先の友人 | 0  | 2     | 2%  |
| アルバイト先の上司      | 2  | アルバイト先の上司 | 1  | 3     | 3%  |
| 家族・親族          |    |           |    |       |     |
| (具体的に:         | )  |           |    | 1     | 1%  |
| その他            |    |           |    |       |     |
| (              | )  |           |    | 1     | 1%  |

表 12 Q 12. あなたは飲酒を強要したことがありますか?

| 回答  | 回答者数 | (未成年者) | %   |
|-----|------|--------|-----|
| はい  | 14   | (0)    | 14% |
| いいえ | 87   |        | 87% |

表 13 Q 13. あなたが飲酒を強要した結果、その相手はどうしましたか?

| 回答          | 人数 | %   |
|-------------|----|-----|
| 断った         | 0  | 0%  |
| 少量飲んだ       | 2  | 14% |
| 強要されるままに飲んだ | 12 | 86% |
| その他         | 0  | 0%  |

(回答者数: 14)

表 14 Q 14. あなたが飲酒を強要したのは次のうち誰でしたか? (複数回答可)

| 男              | 性  | 女         | 性  | 計(人数) | %   |
|----------------|----|-----------|----|-------|-----|
| 大学の先輩          | 6  | 大学の先輩     | 7  | 22    | 22% |
| 大学の後輩          | 19 | 大学の後輩     | 4  | 23    | 23% |
| 大学の友人          | 35 | 大学の友人     | 9  | 43    | 43% |
| 大学の指導教員        | 1  | 大学の指導教員   | 0  | 1     | 1%  |
| (アルバイトの経験のある方) |    |           |    |       |     |
| アルバイト先の先輩      | 7  | アルバイト先の先輩 | 4  | 11    | 11% |
| アルバイト先の友人      | 16 | アルバイト先の友人 | 10 | 26    | 26% |
| アルバイト先の上司      | 5  | アルバイト先の上司 | 1  | 6     | 6%  |
| 家族・親族          |    |           |    |       |     |
| (具体的に:         | )  |           |    | 0     | 0%  |
| その他            |    |           |    |       |     |
| (              | )  |           |    | 24    | 24% |

答者が飲酒を強要した経験があると答えた。そしてこの中には未成年者がいない。また、これらの学生が飲酒を強要した相手は全員がそれに応えている。表 14 では、大学の友人と後輩の数字が目立ち、表 11（Q 11. あなたに飲酒を強要したのは次のうち誰でしたか？）の数字と重ねてみると、飲酒の場に持ち込まれたタテの人間関係が如実に浮かび上がる。

#### 4. 酒は薬物である

さて、大学生、今回の無記名アンケートの回答者となった北大生 101 人の飲酒経験を眺めてきたが、彼らは、彼らの身近にある「酒」というもの、そして「飲酒をしている人」をどのように認識しているのだろうか。回答者の 9 割を超えるものが「アルコール飲料を飲んでいる人、あるいは酩酊状態の人と自宅あるいは居酒屋、バーなどで同席したことがある」と答えている<sup>10</sup>。彼らが飲酒中の同席者についてもっとも気になることは表 15 で確認できるように「他者への言動」（40 %）である。「自分への言動」が気になるという回答（19 %）の 2 倍以上の数値となった。「飲食中の同席者が何を言っても、自分に向けられたものなら、『お酒が入っているから』とあきらめもつくが、これが他の人に向けられたらどうなるか心配になるからではないか」とは受講者の一人による分析である。

表 15 Q 16. その場合アルコール飲料を飲んでいる人、あるいは酩酊状態の人に関して、あなたが気になるのは次のうちどのようなことですか？

|            | 回答者数 | %   |
|------------|------|-----|
| 何も気にならない   | 31   | 31% |
| におい        | 19   | 19% |
| 自分への言動     | 19   | 19% |
| 他者への言動     | 40   | 40% |
| 自分への暴力行為   | 10   | 10% |
| 他者への暴力行為など | 20   | 20% |
| その他        | 10   | 10% |

また、言動だけではなく、飲酒が何らかの暴力行為を引き起こす可能性も意識されている。しかしながら回答者の約半数が「酒は薬物である」という事実を認識していなかったということがわかった（表 16）。「あなたはアルコールが薬物の一種であると認識していましたか」という問い（Q 23）に 49 名の学生が「いいえ」と答えたのである。尚、Q 23 については、問いそのものが、回答者に「アルコールは薬物の一種である」と教示するものであり、アンケートの文言としては望ましくない。

表 16 Q 23. あなたはアルコールが薬物の一種であると認識していましたか？

| 回答  | 回答者数 | %   |
|-----|------|-----|
| はい  | 51   | 51% |
| いいえ | 49   | 49% |
| その他 | 1    | 1%  |

## おわりに―適正飲酒教育のあり方を探る

平成 10 年に内閣総理大臣を本部長とする「薬物乱用対策推進本部」において「薬物乱用防止五ヵ年戦略」が策定されて以来、薬物乱用防止教育は学校教育の場ですすんでいるといわれている<sup>11</sup>。ここでいう薬物とは主としてシンナー、大麻、ヘロインのような薬物である。今の日本において、薬物の中でもっとも簡単に入手できる「入門薬物」と呼ばれる酒は、このような薬物とは別に論じられることが多い。

今年度の授業、「社会問題としての飲酒」（分野別科目「社会の認識」）の受講者からは通学した小・中・高の各学校で「飲酒に関する教育」を含む「薬物教育」を受けた記憶がないという声が多く聞かれた。さらに、「確かに飲酒に関する教育の時間はあったが、プリントの配布程度で、具体的ではなかった」という意見もあった。89%の受講者が「あなたは学校教育の中でアルコールに関する教育が必要だと思いますか」という問いに「はい」と回答している背景にはこのような事実がある。Q 25 として「アルコールに関する教育は次のうちのどの段階で始めるべきだと思いますか」と問うたところ、高校 1 年生（30%）がもっとも多く、中学一年生（20%）、小学校 6 年生（14%）がこれに続いた。同様に多く聞かれたのが「アルコールに関する教育をどの時点から始めるかというよりも、『継続的』あるいは『定期的』な飲酒教育が望ましい」というものだった。

さらに今年度に限らず、これまでの回答者に共通しているのが中・長期的に飲酒を継続した場合に起こり得る「酒への依存」及び「アルコール依存症」に関する知識の欠落である。筆者は「あなたは断酒会という団体についてきいたことがありますか」という問いを用いることにより、アルコールに依存する人々及びその家族・友人らによる自助組織についての情報を回答者（大学生）が有しているか調査してきた。そして 2002 年以来、毎回 9 割以上の学生が「いいえ」と答えることを確認している。このアンケートに答えた後の授業で、回答者はこれら自助組織の関係者から経験談を聴くことにより、授業で学んだ情報に自分なりの肉付けをしている。

飲酒により気分が高揚するの、量が過ぎれば頭痛・吐き気などの症状があらわれるの、授業に遅刻してしまう、学校を休んでしまうの、酒という薬物のなせるわざである<sup>12</sup>。酒が入れば他者に暴言・暴力で接する場合も然りである。一時的にせよ大量飲酒により危険な状態に陥る可能性もある。そして時に大学生が他から強要され、時に他に強要しているのは、やはり酒という薬物である。そして飲酒を中・長期的に継続すれば「依存」という結果を招く可能性もある。

今回の調査は、調査対象の数、特定の講義の受講者のみが回答したことなどを考えると、大学生の飲酒の実態、特に北大生の飲酒の実態をすべてを明らかにしたとは言い難い。しかし、どのような適正飲酒教育が求められているのかを検討する上で貴重な資料となり得ると確信している。

最後に、今年度の「飲酒に関する大学生の意識調査」の回答者となり、同時に調査結果をもとにした活発な議論により筆者に今後の課題を与えてくれた 101 人の北大生、そして過去の飲酒事故について学生の視点で説明してくれた北海道大学恵迪寮自治会・飲酒事故防止特別委員会のみなさん、貴重な資料をご提供くださった北海道大学保健管理センター所長の武蔵学教授、この調査から始まった筆者による拙い講義「社会問題としての飲酒」（分野別科

目「社会の認識」)の中で、自らのご経験をお話くださり、中・長期的な飲酒の危険性をわかりやすく示して下さい。札幌連合断酒会及び家族会の皆様方に感謝の意を表したい。

### 【参考文献】

- 財団法人日本学校保健会『喫煙、飲酒、薬物乱用防止に関する用語事典』、  
財団法人日本学校保健会、2002年  
樋口進監修『アルコールの害』、少年写真新聞社、2006年  
宮里勝政『薬物依存』、岩波書店、1999年  
文部科学省中学生用薬物乱用防止教育パンフレット『No!といえる勇気を持とう』  
文部科学省高校生用薬物乱用防止教育／結核対策パンフレット  
『絶対しません 薬物乱用』

### Abstract

This paper is based on an opinion survey designed to examine the attitudes of Japanese college students toward drinking. The author started surveying Japanese college students about alcohol consumption in 2002 in Kyoto and Osaka. This survey used the responses of 101 undergraduate students in the course, “Drinking and its Social Problems” at Hokkaido University during the academic year 2007-2008. Hokkaido University is one of the national universities in Japan; it is commonly known as *Hokudai*.

Drinking is a part of Japanese college life, and many young people in Japan start drinking in their late teens, despite the fact that they are not legally permitted to buy liquor until the age of twenty. Alcohol can be a serious danger to some students in certain situations. For example, in May 2007, nine members of a *Hokudai* students' group were hospitalized because of acute alcoholic poisoning at a *hanami* party. Recently, drug education programs have been initiated in Japan. However, they have been primarily directed toward showing how dangerous drugs like heroin are. Youth are not given practical information about alcohol as a gateway drug.

The purpose of this paper is to give, through this survey at Hokkaido University, actual data regarding alcohol consumption among Japanese college students.

### Keywords

Problem drinking, moderate drinking, gateway drug, alcohol education, self help group

【資料】

飲酒に関する大学生の意識調査（無記名アンケート）

該当する項目をマルで囲んでください。

Q 1. あなたの身分（学年）は？

1 年生      2 年生      3 年生      4 年生      院 生      その他（      ）

Q 2. よろしければ年齢を（      ）内にご記入ください。

Q 3. あなたの性別は？  
男性      女性      その他（      ）

Q 4. あなたはアルコール飲料（日本酒、ビール、ウィスキー、焼酎など）を  
飲んだことがありますか？

はい      いいえ  
\* いえと答えた方は Q 9. へお進みください。

Q 4. で「はい」を選んだ方におたずねします。

Q 5. あなたは定期的にアルコール飲料を飲んでいますか？

はい      いいえ  
\* いえと答えた方は Q 8. へお進みください。

Q 5. で「はい」を選んだ方におたずねします。

Q 6. 次のうちからその頻度を選んでください。

毎日      週に 2、3 回      週に 1 回      その他（      ）

Q 7. あなたはなぜ定期的にアルコール飲料を飲むのですか？

習慣になっいて得て理由はない      アルコール飲料がないと眠れない  
いやなことを忘れるため      友人らとの会話を楽しむ材料として欠かせない  
その他（      ）

Q 8. あなたは飲酒（アルコール飲料を飲むこと）によって

次のようなことを経験したことがありますか？（複数回答可）  
頭痛      嘔吐      一時的に記憶を失う  
二日酔いで学校に遅刻する      二日酔いで学校を欠席する  
暴言を吐く      暴力を振るう  
その他（      ）

Q 9. あなたは飲酒を強要されたことがありますか？

はい      いいえ  
\* いえと答えた方は Q 12. へお進みください。

Q 9. で「はい」を選んだ方におたずねします。

Q 10. 飲酒を強要された結果、あなたはもうしましたか？

断った      少量飲んだ      強要されるままに飲んだ  
その他（      ）

Q 11. あなたは飲酒を強要したのは次のうち誰でしたか？（複数回答可）

大学の先輩（男性）      大学の先輩（女性）      大学の後輩（男性）  
大学の後輩（女性）      大学の友人（男性）      大学の友人（女性）  
大学の指導教員（男性）      大学の指導教員（女性）  
アルバイト先の先輩（男性）      アルバイト先の先輩（女性）  
アルバイト先の友人（男性）      アルバイト先の友人（女性）  
アルバイト先の上司（男性）      アルバイト先の上司（女性）  
家族・親族（具体的に：      ）  
その他（      ）

Q 12. あなたは飲酒を強要したことがありますか？

はい      いいえ  
\* いえと答えた方は Q 15. へお進みください。

Q 12. で「はい」を選んだ方におたずねします。

Q 13. あなたが飲酒を強要した結果、その相手はどうしましたか？

断った      少量飲んだ      強要されるままに飲んだ  
その他（      ）

Q 14. あなたが飲酒を強要したのは次のうち誰でしたか？（複数回答可）

大学の先輩（男性）      大学の先輩（女性）      大学の後輩（男性）  
大学の後輩（女性）      大学の友人（男性）      大学の友人（女性）  
大学の指導教員（男性）      大学の指導教員（女性）  
アルバイト先の先輩（男性）      アルバイト先の先輩（女性）  
アルバイト先の友人（男性）      アルバイト先の友人（女性）  
アルバイト先の上司（男性）      アルバイト先の上司（女性）  
家族・親族（具体的に：      ）  
その他（      ）

- Q 15. あなたはアルコール飲料を飲んでいる人、あるいは酩酊状態の人と自宅あるいは居酒屋、バーなどで同席したことがありますか？  
はい  
\*いいえと答えた方は Q 17. へお進みください。
- Q 15. で「はい」を選んだ方におたずねします。  
Q 16. その場合アルコール飲料を飲んでいる人、あるいは酩酊状態の人に関して、あなたが気になるのは次のうちのどのようなことですか？（複数回答可）  
何も気にならない    自分への言動    自分への暴力行為    他者への暴力行為 など  
他者への言動    自分への暴力行為    他者への暴力行為 など    その他（    ）
- Q 17. あなたは A（Alcoholics Anonymous）という組織についてきいたことがありますか？  
はい  
\*いいえと答えた方は Q 19. へお進みください。
- Q 17. で「はい」を選んだ方におたずねします。  
Q 18. A のことを最初に知ったのは次のうちのどのような媒体を通してですか？  
新聞    雑誌    ポスター    映画    学校  
家族    友人    その他（    ）
- Q 19. あなたはアラノン（Al-Anon）という組織についてきいたことがありますか？  
はい  
\*いいえと答えた方は Q 21. へお進みください。
- Q 19. で「はい」を選んだ方におたずねします。  
Q 20. アラノンのことを最初に知ったのは次のうちのどのような媒体を通してですか？  
新聞    雑誌    ポスター    映画    学校  
家族    友人    その他（    ）
- Q 21. あなたは断酒会という組織についてきいたことがありますか？  
はい  
\*いいえと答えた方は Q 23. へお進みください。
- Q 21. で「はい」を選んだ方におたずねします。  
Q 22. 断酒会のことを最初に知ったのは次のうちのどのような媒体を通してですか？  
新聞    雑誌    ポスター    映画    学校  
家族    友人    その他（    ）
- Q 23. あなたはアルコールが薬物の一種であると認識していましたか？  
はい  
いいえ
- Q 24. あなたは学校教育の中でアルコールに関する教育が必要だと思いませんか？  
はい  
\*いいえと答えた方は Q 27. へお進みください。
- Q 24. で「はい」を選んだ方におたずねします。  
アルコールに関する教育は次のうちの段階で始めるべきだと思いませんか？  
小学校低学年    小学校中学年    小学校高学年  
中学校 1 年    中学校 2 年    中学校 3 年  
高校 1 年    高校 2 年    高校 3 年  
その他（具体的に：    ）
- Q 26. Q 25. で選んだ項目についてその理由をご記入ください。  
理由：
- Q 27. もしよろしければアルコールにまつわるご経験、ご感想などをご記入ください。

ご協力ありがとうございます。

© Copyright 2002, 2003 Mutsuko YOKOTA

© Copyright 2004, 2005, 2006, 2007 Mutsuko MASAKI

- 1 副学長名で出された学内掲示、「学生の飲酒事故の防止について」（平成19年5月17日）によると、これら9名のうち「半数は意識不明の危険な状態であり、搬送が遅れた場合は死に至る可能性があったというきわめて深刻な状況」だったということである。
- 2 北海道大学保健管理センター所長 武蔵学「お酒をめぐる冒険—安全な「飲酒文化」の構築へ向けて—」『はけからだより』第52号（2005年5月23日）。
- 3 文末資料参照。
- 4 今年度の調査については入力作業をティーチング・アシスタントのKikombo Andrew Kilingaさん（情報科学研究科修士課程）、集計その他を筆者が行った。
- 5 この授業では前回授業のあらましや受講者が毎回提出した感想、簡単な用語解説、連絡事項を“Newsletter”として配布した。
- 6 不起訴、敗訴などを経て2006年11月14日、福岡高裁で勝訴判決。関係者8人が「安全配慮義務」に違反したとして損害賠償を命じられた。アルコール薬物問題全国市民協会がそのホームページで詳細を明らかにしている（<http://www.ask.or.jp>）。
- 7 『朝日新聞』2002年12月17日。
- 8 <http://www.kobe-np.co.jp/kobenews/sg/0000652065.shtml>（神戸新聞WEBNEWS）によると被害にあった男子生徒には、今も、不意に声を発してしまうなどの症状が残り、通院を続けている。
- 9 2002年、2003年に筆者が行った「飲酒に関する大学生の意識調査」の結果の一部が「飲酒、半数が『強要された』」として『朝日新聞』（2003年8月13日）で紹介された。同日、「人民日報日本語サイト」に再録された。
- 10 文末資料「飲酒に関する大学生の意識調査」Q15（あなたはアルコール飲料を飲んでいる人、あるいは酩酊状態の人と自宅あるいは居酒屋、バーなどで同席したことがありますか？）には92名（91.09%）の学生が「はい」と答えた。
- 11 平成12年度に実施された「児童生徒の薬物等に対する意識等調査」（文部科学省）によると、児童生徒の薬物に対する意識が全般的に改善されつつあることがうかがわれる。また、少年の覚せい剤事犯検挙人員が減少傾向にあるなど、児童生徒の薬物乱用に一定の歯止めがかかったと認められる。
- 12 例えば酒（アルコール飲料）はその後の薬物使用のgateway drug（入門薬物）として位置付けられている。